対談

光野有次＋三好春樹

そろそろ自分の老いを語ろうか

工業デザインにおけるブリコラージュ

光野　三好さんはブリコラージュという言葉を、器用仕事、便利仕事と話された。そういう部分と、われわれの仕事がどこまで同じで、どこが違うのかなと考えてきました。僕は何か使えそうなものがあると残しておきます。それを別のものに使ってみたりすることがあるんです。ブリコラージュのたとえとして、何に使うわけではなくて、そこに入れておいて、あるとき、それを出して使うという感じですかね。

三好　まったくそうですね。ブリコラージュは、近代的な設計図で同じものを大量につくるというところに対抗した言葉です。つくるたびにみんな違うし、個性がある。その場限りの一回性でしか成立しないものに価値があるとレヴィ＝ストロースが言い始めたのです。

私たちは、「老い」を救済すべき対象で、正常な人間から外れていると思って、治療してやろう、リハビリしてやろう、あるいは介護してやろうという発想をするわけだけど、そうではなくて、老いを異文化としてとらえる。40代～50代のバンバン金儲けする効率主義の世の中とは違う文化や生き方、知恵があることを見つけられないと、単なるこちら側の自己中心性になる。自分の価値観の中に相手を位置づけてしまうということにしかならないわけですよね。そうじゃないということを、見事に示した人がレヴィ＝ストロースです。彼は自民族中心主義を批判したのだけれど、私たちでいえば、自世代中心主義ですよね。老いは異文化だととらえればいい。

介護も
モノづくりも
捨てたもんじゃないぜ

光野　三好さんなりに置き換えたんですね。僕たちは、まさしくユニバーサルデザインでそれを教えられました。それまで、一人でも多くの人たちが使えるように、買いたくなるようなデザインをすることがいいと教えられていたのです。それが工業デザインのセオリーです。一人ひとりの要望に合わせて個別につくっていくやり方は、若干ブリコラージュの精神が宿っていると言えるのでしょうね。

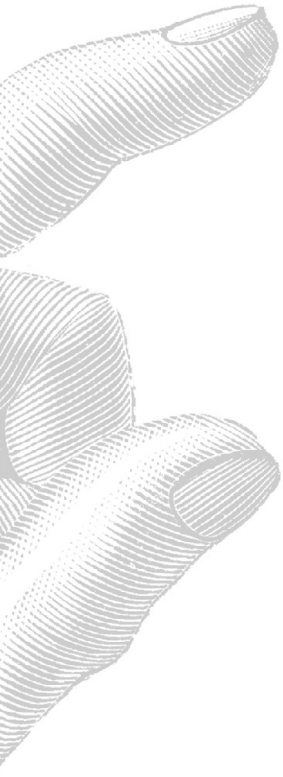
三好　光野さんがやっていることは、具体的に目で見てふれて、声を聴いてということの繰り返し。つくっているものを見ても、何ひとつ同じものがない。それこそブリコラージュです。相手にも役に立つし、こっちも豊かになるのだということが今、介護全体に足りないような気がしています。

子どもと老人、こんなに違う

光野　三好さんの講演を初めて聞いたのは 1986 年頃だったかな。一番印象に残ったのは、「老人問題は老人の問題ではなくて、人が歳をとったときに対応できない社会の問題だ」という言葉でした。これは衝撃的でした。

三好　当時、老人問題はまだ語られていない時代でした。でも、その頃から子どもの問題はありました。PT 養成校の実習で、子どもの施設に行きました。おもしろかっ

三好春樹（みよしはるき）
本誌発行人



たのは、みんなが子どもの 10 年先、15 年先を考えて取り組んでいたことでした。子どもの発達に沿って、何をすればいいかを時間系列で見ていくことは、老人分野から見るととても新鮮なことでした。高齢者は、今が一番よくて、明日、明後日はもっと弱るわけだから、今笑顔を引き出そうとするわけで、子どもの世界とはずいぶん違うと思いました。

光野　最近、伊丹十三の映画を観ました。死をゴールにしてそれまでどう生きていくかという話なのですが、子どもには死の発想がないですよね。

三好　それが、老人ケアのおもしろいところでしょうね。私は「生活」とか言いながら、あんまり生活感のない人生をおくっていますし、「ブリコラージュ」と言いながら、具体的にモノをつくることがないのですが、でく工房を見ていると、具体的にモノをつくる強みを感じました。具体的な形にして見せる強さです。

光野　僕たちは、「椅子をつくってくれ」と頼まれてつくるわけではなくて、「この子をきちんと坐らせてくれ」と注文を受けるわけです。周りの人がいかに「立派な椅子ですね」「きれいな椅子ですね」と言っても、その子が坐れなければ意味がなくて、お金ももらえません。子どもに比べると、お年寄りからの注文は少ないですよ。

三好　老人の世界も個別化とかさんざん言っていますが、車椅子などがどこまで個別化されているかというと、子どもの世界でやっていることとはかなり差があると感じます。

光野　補装具の中に「座位保持装置」の制度が取り入れられたのは、われわれの功績だと思っています。補装具の制度は「義肢」があって「装具」があり、「その他」の中に「車椅子」があります。基本的に対象は児童であって、高齢者は対象になりませんでした。高齢者にも同じように個別化の対応が必要なのですが、日本の固有の問題として縦割りの制度になっているので、高齢者の「座位保持装置」は例外的にしか認められていません。

三好　高齢者でいえば、脳卒中片マヒだけでもいろんな工夫がいるはずなんですよ。工夫がないから、大体身体が横に倒れている。それを補正しようとして、座布団を突っ込んで、ますます身体がくずれているのを現場で見るのだけれど、そういう、疾患、障害だけでも個別的な対応ができるようにしていくようなことが大切ですね。

光野有次（みつのゆうじ）
工業デザイナー／（有）でく工房
1949 年、長崎県佐世保市生まれ。金沢美術工芸大学卒業。1974 年、東京都練馬区に仲間と「でく工房」を設立し、障害者のための用具づくりを始める。スウェーデンでの福祉用具と社会福祉システムの調査研究を経て、1988 年、「ハンディをもつ人の食器・椅子から建物・街づくりまで」を仕事の領域とする「無限工房」を長崎県諫早市に開設。「通販生活」のベストセラー商品「かに座」や「ゆり座」は光野さんのデザインによるもの。
著書に「生活づくりのシーティング」「シーティング入門」「みんなでつくるバリアフリー」「無限のモノづくりと仲間たち」など多数。

姿勢が変わると世界が変わる

光野　年齢や障害などの属性にかかわらず、坐位保持困難というくくり方でいいのではないでしょうか。たとえば、特別支援学校で 40 分の授業中、坐り続けられない児童がいます。40 分間坐っていることができないで動き回るので、多動だと言われてきたのですが、その子どもたちの身体に合う椅子をつくったら、40 分きちんと坐れるようになりました。さらに、手も上手に使えるようになったのです。

三好　多動は脳や精神の問題だと思っていたけれど、椅子の問題だったというわけですね。

光野　そうなんです。骨盤を支えて背中を合わせられるものをつくったら、多動の問題が解決したという例もあるのです。

三好　姿勢が過剰な刺激になっているとか、身体のある部分に対して不快な部分があることが原因で多動になっているというとらえ方ができないことはないですね。

光野　多動の子たちがどうして立って動き回るのかと先生に聞くと、坐るのがつらくなるから立つのだという話なんです。歩き回りたいから立つのではなく、ジッと坐っていることが苦痛だということです。坐位のバランスが悪くなければ、坐っているより立ったほうが楽だということなんですね。

三好　認知症の世界も似ていることがあって、問題行動が起きるのが脳のせいだと考えてしまいがちですが、原因の半分は便秘のせいなんですよね。具体的なことの中に解決の糸口がある。これは現場にいる人が見つけるんでしょうね。高齢者の分野で、片マヒの人の場合はどういう椅子がいいのか、ぜひ考えてほしいですね。

光野　僕は老人の施設にも行っていますが、坐り方を変えると、その場で別人のようになります。

高齢者ではありませんが、前日まで手が動かなかったのに、坐って安定させると本人の機嫌がよくなって、翌日お父さんとキャッチボールができた事例もあります（31 頁参照）。本来使えたのに、使い方も忘れていたんでしょうね。姿勢が変わることで変化する姿を何度も見てきました。

三好　坐っているときは骨盤がベースです。立っているときは骨盤のことを気にするんだけど、坐っているときの骨盤については、あまり評価しないですね。骨盤が傾いていると上半身がまったく自由がきかなくなることは想像つくはずなのに……。

光野　人間は、立位歩行に特化し進化していったので、坐位がおざなりになっていると思う。犬も猫も長く坐りますが、人間だけが坐った途端に骨盤が倒れるのです。立つほうに特化したから坐ることに配慮していないのです。坐るとアンバランスになる。坐骨がありますが、坐るための坐骨とは思えないんですよ。坐位が苦しいと思った人たちがバックレストを発明したのだと思います。椅子は人間の生理的なものの不全さをカバーする見事な道具です。

独特の発展をした日本の車椅子

三好　建築の資料では、テーブルも洗面台も下を 80 ㎝あけなさいと書かれているのですが、80 ㎝では、高すぎます。PT がよくない。車椅子のアームレストが下に入るようにしなければいけないなんて言うから。

光野　車椅子のアームレストがテーブルの下に入るのは、本人の生活動作にはまるで関係ないことです。たまたま 1945 年にアメリカで開発された普通型車椅子をテーブルで使うようになってしまったからなのです。欧米では車椅子に坐らせたまま食事させるというのはあまり見かけません。

この仕事をやり始めた 1974 年、特養ホームに行ったことがあります。その頃、施設には車椅子は 1 台もありませんでした。1980 年代ぐらいからポータブルトイレや車椅子が特養ホームに入ってきました。食堂の椅子は社員食堂の椅子のようで、坐って身体が横に倒れる人は食堂で食事をすることはできませんでした。食堂に行けないから、ベッドで食事。歩けなくなったら、おしまいという感じでした。本人の身体を支えるちゃんとした椅子を導入する前に、ポータブルトイレと車椅子が入ってしまったのです。車椅子は便利で安全に食堂に行けます。そして、そのまま車椅子で食事をとることが当たり前になった。

車椅子の歴史から見ても、日本の車椅子は独特の発展の仕方です。元々、普通型の車椅子は運搬用につくられたものでした。そのあと、脊髄損傷系の人たちが車椅子を利用するようになりました。そして、デスクタイプが登場しました。事務作業をやるための車椅子です。それが高齢者に採用されることはありません。なぜかというと立ちあがるための手すりが足りないからです。そういうことで、高いテーブルが採用されるということが起こったのだと思います。

三好　ベトナム戦争で足をやられた若い人に 80 ㎝がちょうどいいというのはわかるけど、日本人のお年寄りではおかしいというのは、見たらすぐにわかるはず。現場で感じて見て考えていく発想をしてくれないし、いまだに新しい施設をつくるときに、下 80 ㎝を基準にしている。

光野　高いテーブルで鍋をやったりした日には大変ですよね（笑）。

人の役に立つ喜び

三好　光野さんが、なぜいい仕事ができるかというと、現場に行って、本人に会って、

そこで考えてどうするかという考え方ができているからだと思う。そういう発想が介護は薄くなっているのです。目の前の具体的な人を見てさわって、それからモノができるという発想ではなくて、すでに便利なモノがあって、それを適用すればいいというふうになってしまっている。

　コミュニケーションもそうで、目の前の人を見たり聞いたり、集中して何を言っているのか感じとって、なんとか通路が開けていくことでコミュニケーションがとれるのだけれど、コミュニケーションがうまくなる講座みたいなのがあって、そこでマスターすればうまくいくと勘違いしている人もいる。

光野　皆さん、講座に参加するのは、真面目で勉強熱心だからでしょうね。

三好　介護現場の人は真面目ですよ。いい介護をしたいという人たちです。他の仕事で「いい仕事」といえば、いかに金になるかという意味であることが多いけど、介護は、「金になるけどやっちゃいけない、金にならないけどやったほうがいい」というところが通用する世界です。そういう意味では、「思いがある人」が介護の世界には残っていて、捨てたもんじゃないぜって思う。

光野　人の役に立つことを実感できることは、すばらしいことです。僕自身も「人の役に立っているんだ」ということが、僕を支えている部分があります。これが傲慢になってしまってはいけないところですが、いいサービスをしなければいけないというのがあるべき姿だと思っています。今、自分がいる世界は、自分が活かされていることが一番実感できる現場であると思っています。こういう感覚こそが必要なことだと思っているんですけれどね。

三好　光野さんが、個別に一つひとつつくって、やっていけるというモノが社会に存在しているのは希望だと思います。介護現場もそうですが、一方でグローバリズムの波があります。介護保険になってから、さまざまな業界の人が参入してきました。その人たちの論理はいかに効率よく金儲けするか。金にならなくてもがんばらないといけないということが通用しません。そういうのが当たり前の社会で、遅れている介護の世界を近代化するんだという大義名分でやってくるわけですけど。せめぎ合いですね。

光野　せめぎ勝つのがわれわれだと、僕は思っています。人と相対（あいたい）して、もらう力は大きいですよ。それによって、自分が活かされているという感覚は、グローバリズムと真っ向から対抗できる力だと思っています。介護現場の人たちが生きいきできることが、今のグローバリズムを蹴っ飛ばせると思っているんですけれどね。

共犯者になろう

三好　そういう意味では、いい介護をしようとするだけで、今の世の中の価値観をひっくり返している気がしますね。私は資本主義に亀裂を入れているという言い方をしているんだけど、希望のある世界です。数字で対抗するのはかなわないから、エピソードの積み重ねで対抗するということでしょうか。でく工房で見せてもらった椅子一つひとつに物語があると思うんですよね。本人や周りの人のエピソード。そういうことを体験した人は、グローバリズムから、数字の世界から、少し離れられるのではないでしょうか。

光野　そうですね。それが一つの対抗勢力になっていけるかどうかでしょう。自分の中でもせめぎ合いがあります。食えなかったらダメだなとか、いろいろあるなかで、自分の中で位置づけていく。エピソードというと具体的にどんな感じですか。

三好　今は、金を出せばこれだけのサービスが受けられますよ、というふうになっています。もちろん、それでいい人はいいのです。でも、金に換算するサービスを超えていく体験をすることで、あぁ生きていてよかったと思えることがあると思うのです。生きていても仕方ないなと思ったときには、金を持っていてもしょうがないし、そのときにグローバリズムはまったく無力だと思う。

だいたい、私は、介護はサービスか……？と思うんですよね。記録をとることが、事故が起こったときの責任逃れのためだという「消費者」と「サービス提供者」という関係はまったく救われない。これを超えるためには、本人と家族が一番困ったときに、たとえ解決はしなくてもいっしょに考えたというような経験が必要なのだと思う。私は「戦友になる」という言い方をするのですが、高口光子さんは「共犯者」と言っています。家族と介護者がいっしょに、老人をあの世に送るまでの共犯者になればいいと言うのです……（笑）。

光野　なるほどね。じつは、同じようなことを僕たちも体験しています。昔は本当に寝たきりの子を起こしただけで拍手喝采でした。今は競争も出てくる、海外製品も入ってくるなかで、私たちがやったことのないような困難な相談も出てきています。でも、家族といっしょに考えながらやっていくので、仮にうまくいかなくても苦情は出ません。しかし、そんな家族との関係が築けていないまま、右から左に流す仕事ではクレーマーも出てくる。

僕たちも極限状態の仕事をすることがあります。痰が絡むことがわかっていてもやるから、仮に痰が絡んで亡くなることがあったとしても、僕たちが責められることはないです。そういう関係の中で、現場とともに仕事をしています。たしかに、共犯関係といえば、共犯関係だな（笑）。

三好　決められたことを超えるところにおもしろ味、人間味があるんですよ。好き嫌いをいけないというけど、それがあるから人間なんだし、それが人生のおもしろさで、

それをなくした漂白世界にしてしまうと、おもしろくもなんともないですよね。

生きづらさは変わったか

光野　自立生活運動が日本に入ってくるきっかけのような場所に僕もいたけれど、そういうところの雰囲気に似ているね、今のお年寄りの世界は。

三好　あれは大変でしたねぇ。「青い芝の会」とかでしょ。

光野　おもしろかったですよ。日本の障害者運動では、「青い芝」なしでは語れないと思っています。そういう強烈な場所の横に僕がいたぐらいのことですけれど。

三好　強烈な思想的問いかけがあったと思います。基本的に、老人介護をやる人は押さえておくべきことだと思います。強烈な問いかけを受けた良心的な専門職がいっぱいいた一方で、辟易したというヤツもたくさんいました。健常者だってことだけで、告発されてこきつかわれてという体験したわけだから、そりゃいろいろあるわけだけど。ただ、それでもなんとか向き合おうとしたということは信用していい。そういう経験をした意味が何かあるのだと思います。

光野　介護をしている若い人たちの雰囲気を見ていると似ているなと思いますね。

三好　私たちの頃と違って、自分自身の生きづらさがあって、そこで認知症老人に共感していくというルートが一つあるね。

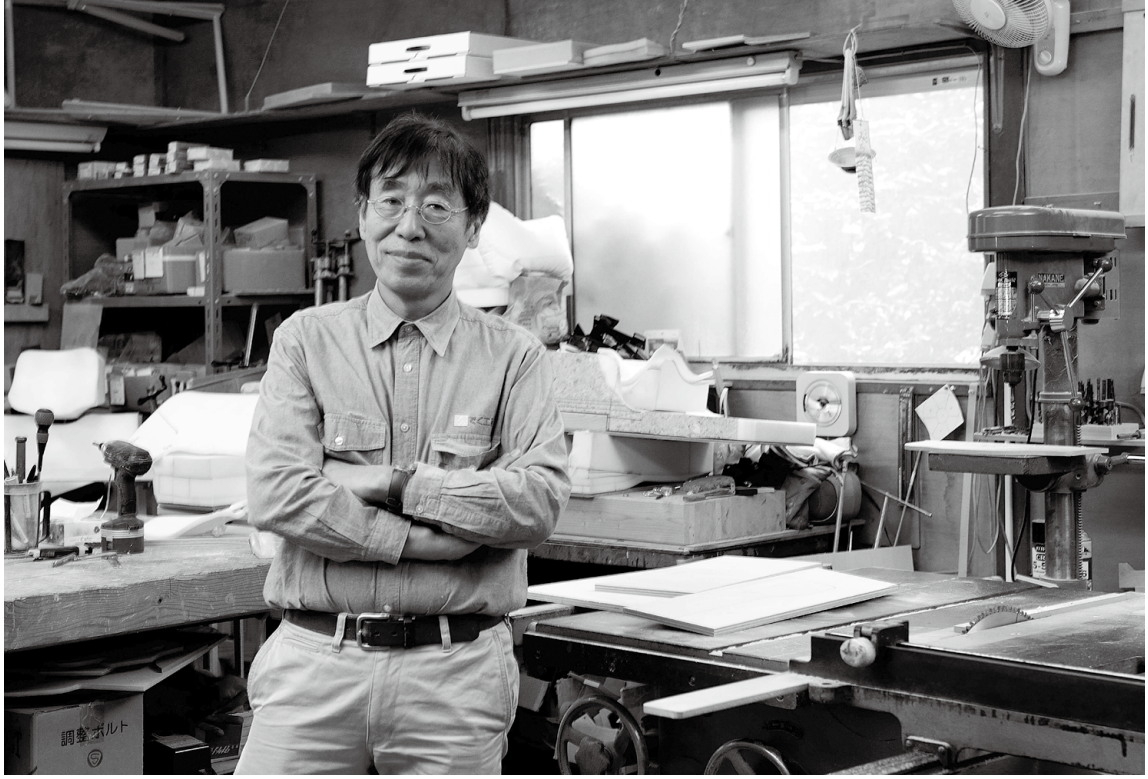
光野　僕も息苦しさを感じて、学生運動の挫折も目の当たりにしていて、自分たちはどう生きたらいいのか、というところから入って行った部分もあるので共通するところはあるのかなぁ……でも、僕は観念的で暗かった（笑）。

三好　私たちの頃は、ベトナム戦争があってどうするんだ、というところから入っているけれど、彼らはそういうのに興味がなくて、自分が生きづらいというところから出発していますね。

　最近若い人が、資本主義はよくないとか平気で言うんですよ。じゃ、マルクスを知っているかといえばそうではない。ちょっとびっくりしているんですけどね。

光野　明るいつらさかも（笑）。僕たちが今の仕事に入る頃は、共同体に興味をもっていた。そういうときの感じと、老人の住まいの場を経営していくときって、似ているのかなぁ、一種の疑似的な共同体。

三好　どの時代でもそういうロマンが出てくると思うけど、ユートピアをつくろうとするとダメですよね。私は「90 点の理想的な共同体や社会をつくろうと思ったらダメ。絶対に欺瞞が入るから」と言います。世の中のレベルが 60 点とすると、65 点から 70 点ぐらいでいいと思え、困っている人が 1 人出てきたら、そのときは 80 点に上げればいいのです。でも、その 80 点は長くは続かないから、落ち着いたら、また 65 点まで落としていいよ。世間よりちょっとあったかい共同体をつくろうっていう発想です。



ずっと高いものを目指したらダメになる。昔から共同体主義はうまくいった試しがないね。武者小路実篤の「新しき村」や、ヤマギシズムとか、オウムだってそうだし。ある種、魔力のある世界だから、閉じちゃう可能性が強いんだね。

さあ、いよいよ自分の老いと向き合う時期がきた！

光野　吉本隆明さんと三好さんの本「『老い』の現在進行形──介護の職人、吉本隆明に会いにいく」がおもしろかったですよ。

徐々にではなく、どーん・どーんと、段階的に老いに落ちていくという感じ。吉本さんは正直に、ものすごく深く自分の老いを表現する力をもっていると感じましたね。

三好　自分の感覚を既成概念なしに語ることができる珍しい人でしたね。みんな思っているけど言わなかったことを言える人です。おもしろかったのは、どんな介護職がいい介護職かと尋ねたら、地を出せばいいと言うんだよね。優しい人は優しく、怖い人は怖くていい（笑）。猫をかぶってもわかるという意味なんでしょうけど、そのままでいいんだっていう言い方をしていましたね、あれには非常に救われました。

光野　対談から13年経っていますが、今はどうですか。吉本隆明が言っていることが、自分に引き寄せて考えられるということはありますか。

三好　んーーー、まだちょっと時間がかかる感じかなぁ。老いは、身体からくることもあるし、環境的世界から生じるものもあるだろうし、いろいろだと思うんだけど。身体だったり、精神だったり、具体的な人間関係などが絡み合ってくる感じがする。老いを身体とか精神だけではなくて、総体でとらえたいなというのが私の中にはあります。身体はどっちにしても退化や病気があるけど、人間関係の取り方と自分の精神の取り方で、どうごまかしていくのかというのかなぁ……。老化はどうしようもないし、病気もある程度どうしようもない。そのどうしようもないものに対して、どう調

でく工房にて

和をとっていくのかということでしょうね。

光野　僕は椎名誠の愛読者でもありますが、『ぼくがいま、死について思うこと』を、つい最近読みました。腕立て伏せを今も朝から 100 回やっているとか、非常にマッチョなんです。老いることについては、ほとんどネグって（知らんぷりして）いる。死については興味があるというが、それも死んだあとの話。どんなふうに火葬するのかなどに関心があるわけです。動けない状態の高齢者になった椎名誠は生きていけるのかな、という感じがしましたね。

三好　老いも死も見ていないから書けないんですよ。介護の時代というけれど驚くほど知らないですね。親が要介護になって、専門家である自分のところに聞きに来る人もいますが、介護は向こうから全然見えていない世界なんだなと感じます。

光野　重症心身障害者の施設の実態も知っている人は少ないですよ。僕たちがそこを知っているということは、強みであると思っています。モハメド・アリのように、ふるえるところを見せる人はいないですよ、ふつうはね。

三好　あの人はすごい、重いパーキンソン病だけど人前に出てくる。長嶋茂雄さんも大したものだと思う。

　課題は、歳をとったときに自分の老いにつき合えるかってことです。自分の老いについてしゃべったことがないから、今日はこうして話せてよかった。結論は、いかにごまかしながら調和をとるか、ですね。脳の病気がたくさんあって、大変だとかいうけれど、あぁそう、あぁそうとニコニコして、長谷川式スケール 0 点でも誰も困らせてないばあさんはいっぱいいる。いい見本がいっぱいある。だから認知症だって恐れることはないね。なんとか調和とれるんだよ。

光野　ボケとトボケはいっしょだもん。

三好　寝ぼけもね（笑）。

2013 年 5 月 収録 / *photograph: Tetsuya KAWAKAMI*